

Handwritten text in a cursive script, likely a manuscript or a page from a book, located at the top of the page.



もん がい と にん げん こう

考 人 間 徒 外 門

人 間 ら し い 生 き 方 の 探 究

佐 道 正 彦

Masabiko Sado

Handwritten text in a cursive script, likely a manuscript or a page from a book, located below the main drawing.

Handwritten text in a cursive script, likely a manuscript or a page from a book, located at the bottom of the page.

文 芸 社

電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。

もん がい と にん げん こう
門外徒人間考

人間らしい生き方の探究

佐道 正彦

Masahiko Sado

目次

第一章 人はどのようにして生まれたか

なぜ人間らしい生き方が問題となるのか 10

人とは何かⅡその本質は 11

現代の知識から見ての説明 12

人類社会の形成 17

類人猿学からの考察 23

人類史のタイムスケール 27

人類Ⅱ人間とは何か 29

自己を律する能力 31

能力の増大に連動するもの 32

人類の進歩とは？ 32

第二章 家族、国家の起原

先史時代の文化段階 38

家族の発生 42

第三章 宗教について

- 私有財産の発生 44
- 一夫一婦制家族の発生 45
- 国家の起原 47
- 唯物史観の理解 65
- 奴隸制と農奴制 67
- 基本命題 72
- 歴史を動かす要因についての諸命題 74
- 宗教の役割 82
- 宗教のおこり 82
- 現世的な機能 84
- 権力の権威付け 85
- キリスト教 86
- キリスト教の成立 88
- その後のキリスト教 98
- 科学Ⅱ人間の知の拡大に対する抑圧 108
- 政治権力と宗教教団との分離へ 109

仏教について 112

ブッダの思想をめぐって 126

道徳と宗教との関係 134

第四章 孔子と儒教道徳

「仁」について 154

日本における儒教の役割

時代にそぐわなくなった 163

158

第五章 人倫について（倫理学）

アリストテレスの『倫理学』 181

中世封建社会での個人の抑圧 184

抑圧からの脱却としての人間主義 186

フランス革命と人権宣言 187

個人尊重の思想 191

良心について 193

最大多数の最大幸福 196

並立すべき人権思想 197

幸福・生きがい・個人の欲望 198
現代の倫理 211

第六章 現代社会についての理解

- 最初の認識 214
状況の変化についての理解 221
その基礎となった経済思想 223
ケインズの経済論について 226
戦後の日本経済 229
ケインズの政策の吟味 237
労働力再生産としての消費 247
輸出至上主義へのドライブ 248
ケインズの政策の蹉跌？ 250
なぜマネーゲーム化するのか？ 257
新自由主義路線の破綻 259
精神の荒廃現象 263
実体経済から遊離した資本の暴走 264
世界恐慌の再来 265

第七章 二十一世紀社会主義へ向けて……

269

- いわゆる実体経済から見ての問題 271
- そのメカニズム 273
- 労働力の確保とその保全 275
- 雇用の仕方 277
- 生産・労働過程 278
- 剰余価値とその使い方 281
- 徴税のあり方 283
- 公的支出・投資をめぐって 286
- 公共サービス部門の拡充 287
- 営利経営としてはそぐわない 288
- 社会の果実の使い方 289
- 海外交易の意味 290
- 可能な限りの自給・節度ある欲望 291
- 市場原理自由主義の基礎としての私有財産制 293
- 私有財産制のあり方 296
- 市場の意味と限界 299

交換経済から脱した社会	301
福祉社会に対する抵抗	304
官僚主義の問題	305
民主主義の深化	306
その数々の課題	308
オルタナティブとしての社会主義	309
社会主義の理念	312
共同体社会	313
大規模生産手段の公有化	314
政治革命の先行について	316
いわゆる先進国の場合	319
日本での一つの経験	320
協調可能な時は協調して	322
平和・福祉社会・民主主義	323

最終章 おわりに

あとがき 337

第一章 人はどのようにして生まれたか

なぜ人間らしい生き方が問題となるのか

まず個人の問題として

私の場合、敗戦の直後に初めて「人間らしい生き方」という言葉を聞いた。その時八歳か九歳頃だった。

太平洋戦争の最中には、生きることの意味を世間や周囲の人が問題にしているようには私には見えなかった。人びとはむしろどのように死ぬることになるのか、どうすれば死なずに済ませることができるのが問題だった。

そして、戦争が終わって生き残った私（たち）にとって最初にこの言葉の意味したことは、「まともに食べる、着る、住む、学校へ行つて勉強する『日常をとにかく無事に過ごす』ことであつた。

もちろん、私より少し上の世代の青少年では、幾分違つていたかもしれない。当時、小学校の上級生や中学生以上の人たちは、戦時中の教育で「国のためにいかに死ぬか」を叩き込まれていた。ところが敗戦を契機に、それまで教えられてきたことが、まったく間違いだということになった。当然「いかに生きるか」「人間らしく生きる」とはどういうことか深刻に考えた人は多かつたと思う。

私自身も成長し、自分の進路を考える年頃になるとこの問題と向き合うことになった。

若者は将来の進路を決めようとする時、また成人でも時々々の節目には、今後いかなる生活を送るか

考える時、「人間らしく生きる」とはどういうことか、考える人が多いだろう。

社会のあり方をめぐって

個人の生き方として、それぞれ各人のきっかけがあつて問題になるが、個人の生き方に決定的な影響を与える社会のあり方をめぐっては、現代はこれまでになく深刻に問題が提起されている。二十一世紀に入り、世界、経済、社会、文化、個人生活、あらゆる面で大きな変化が始まった。二十世紀に正当と考えてきたことに疑問を感じ、一から考え直さなければならぬ問題がたくさんでてきた。

これから目指すべき生活、社会はどのようなものでなければならぬか。目指す方向は、すべての人が「人間らしく生きる」ことであることに間違いないが、これまでのながれに身を任せることでは済まない事態に遭遇して、改めて人びとは自分たちの進路、生き方を真剣に模索し始めている。

人とは何かⅡその本質は

ダーウインの進化論

ところで「人間らしい生き方」を考えようとした時、その人間とは何かがまず問題となる。その出発点は、やはり人間Ⅱ人類の生い立ちから見ていかねば、私の思考は始まらない。

これからとり上げる問題すべてにわたって、まったくの素人だから、このエッセイは私が今まで目

にしてきた先人の著作などをもとに、それを自己流に解釈したり、引用・抄記して構想したプロセスの記述で、それぞれ専門の人たちから見れば読むに堪えない部分も少なくないかもしれないことを最初におことわりして始める。

その最初の手がかりが一八七一年にダーウインが著した『人類の起原』であった。

ここで彼は、「人間はそれより下等なある生物から進化した、それは現存するサル類と同じ祖先である」と述べた。以来この見解は次第に人びとに受け入れられ、今ではわれわれにとって「真理」とされている。

彼は生物の進化のメカニズムとして、周知のように自然淘汰よゆうたを言っているわけだが、これは環境（気象条件、地理的条件、他の生物種との関係など）へ適応するように生物は変化する、適応できなかった動植物の種はやがて滅びる、ということである。その場合に、特に高等動物では性淘汰（オス同士の競争、メスによる好ましい相手の選択）が果たす役割を重視しているのだが、そのことは以前私が考えていた以上に重要なことで、注目しておきたい。

現代の知識から見ての説明

この進化のメカニズムについては、以後いろいろ詳しい知識が得られているわけだが、それによると次のように説明されていると思う。

ある程度進化した生物の形質（形態と性質）は主として生殖細胞（動物では精子と卵子）の染色体を構成するDNAによって子孫（次世代）に遺伝し引き継がれる。

原則として子孫に遺伝情報を伝える染色体は何世代も変わらないと考えられている。その結果として、人類も何万年もの間に大きな変化なく、ほぼ同じ形質のまま現在まで生存し続けてきた。

とはいえ、人間の染色体を構成するDNAというものは、三十億個の塩基配列が鎖状になった有機物質で、放射線や変異原性化学物質により配列の仕方が変化する。変化の程度によっては元への修復を行う機構が働くが、完全に一〇〇%修復されるわけではない。

一世代交代で平均五千万分の一は変化して次世代へ移行すると言われている。きわめてわずかではあるが、一千万年（一世代二十年として五十万世代）もすれば一%前後は変化することになる。

ちなみに人類の祖先がサル的一种である類人猿から分かれて、独自の歩みを始めるのが一千〜五百万年ほど前と言われる。そして人間と、最も近い仲間であるチンパンジーとは遺伝情報（DNA）の相違は一・二三%だともされている。

環境適応と「進化」

世代交代（親から子へ）の過程で、DNA構造の大きな変化、それに連動する染色体Ⅱ遺伝子の変化があると、突然変異、先天異常が起こるが、大抵は生物個体にとって好ましくないものなので、次の世代への継承はほとんどない。だが微細な変化、たとえば皮膚へのメラニン色素の沈着を促す遺伝子ⅡDNA構造の一部とか、足の骨の長さを決める遺伝子のごく一部などが変化して次世代に伝えら

れることは当然あつただろう。

メラニン色素⇨皮膚の黒さが太陽光線を遮るために、赤道付近の人びとにとって有利であればその地方で皮膚の色の濃い人たちが増えもし、色の濃さも強まる。すなわち環境により適した形質であればその変化は遺り、その形質を持つ者が増える、これがここで言う環境条件への適応である。

かくて、生物は環境により適合する方向に自分たちの形質を変化させてきた。しかも環境自体⇨地殻の変動、気温や降水量などの気象の変化、周囲や近辺の他生物の盛衰なども、万年単位で見るとかなりの変化の連続であつた。それらに適応していくために、それぞれの生物種はそのつど自らを変えていかねばならない事態もあつた。その環境に適合した形質の遺伝子⇨DNAができたものたちが生き残り、あるいは繁栄した。

DNAの変化が従来のものより限度を超えた（互いに交配して次世代をつくれぬ）時、新しい生物種が生まれる。こうして何億年か経つて現在ある多彩な種類の生物が生まれた。これをわれわれは「生物の進化」と呼び慣れている。

人類もその中の一つである。

他動物との違い

現代の人類学では、人類が現存する類人猿⇨チンパンジー、ボノボ（ピグミーチンパンジー）、ゴリラ、オランウータンなどと共通の祖先であるある種のサル類から分化したとされているわけだが、その中で人類特有の特徴として次のようなことが挙げられる。

- 二本の長い足で立ち続けたり、走るに適した特有の下肢の構造
- 細かい細工もできる手と指の構造
- 他の類人猿とは異なり、哺乳類の中では比較的珍しいまばらな体毛

こうした外見上の特徴の上に

- 道具を創り出し
- 火を使いこなし
- 寒冷地では衣類を身につけ
- 話す言葉を持ち
- 知能が他動物と比較しとび抜けている、特に物事の抽象能力など
- 「群れ」から出発し、「複雑な社会」を構成し、高度の文化を築き上げる

このような能力を備え、生物学的にはホモ・サピエンス特有の通常二十三対四十六個の染色体ⅡD NA構造を持つ細胞によって成り立つ生物ということである。

その由来についてはもちろん確かなことは分かっていない。

人類の由来

ただ、私が目にした最近の著書からみると、次のように多くの研究者は考えているようだ。

今から一千万年ほど昔、アフリカ大陸の熱帯の広い森林は、類人猿の共通の祖先たちにとつては、植物の芽、若葉、果実、種実、根菜、各種の虫類、その他豊富な食物源に恵まれた環境にあつた。その中で彼らは樹木の上から地上、水辺の広い範囲にわたる生活空間の中で暮らしていた。彼らを襲うライオン、トラ、豹などの大型の肉食獣は森林の奥深くには必ずしも多くはなかつた。

しかし、一千〜五百万年ほど前に、彼らのかんりのグループが、地殻の変動？ 気象環境の変化？ 個体の増加？ で、森を出なければならぬ事態が生じた。森の周辺や広大なサバンナ？ あるいは沼、湖水、川辺のような水際？ いずれにせよ、かつての自然環境と比べればはるかに厳しい条件に遭遇することになった。

食料も小動物、幼獣、やがては羚羊類のような敏捷な中等大以上の獣にも狩りの対象は広がり、いつの時期からか魚介類もその対象になつていった。彼らはそれらを追つて生活の場所を次々と移動もしなければならなくなつた。

大型肉食獣に襲撃される危険性も増え、それに対する防衛の必要性も高まつた。

地球上の広い範囲にわたつて生活の場を拡げざるをえなかつた。もちろんその場合に、彼ら持ち前の旺盛な好奇心が大きく関与した。

その間にも地球の気象条件は幾度も氷河期があり、その解消期には海面が上がり海岸線は後退した。寒冷が続き、熱暑、乾燥、飢え、渴きにも遭遇した。グループによつては火山の大噴火にも襲われ

た。

幾万世代かをかけて、徐々にDNAが変化し、こうした環境変化に適応しえるように、自らの身体を変え生活習慣を作り変えた者が、上記の諸特徴を持つ人類として生き残った。

人類社会の形成

生物学的な人間がこのようにして生まれたとして、私の問題意識からすれば、彼らが現代へ連なる社会を形成してきた能力こそが最大の関心事である。

そして、この問題を考えるに当たって私が出会った中で最もインパクトを受けたのが、ロシアのユイセミヨーフ著『人類社会の形成』である。おもに一九六〇年代の化石人類学の知見を基に広範な関連諸科学の成果を再構築して書いた本で、そこに描かれた人類社会形成のストーリーは当然ながら多くの推測を交えたものであるが、私の理解に従ってかいつまんで記すと次のようなものだった。

動物個体主義に支配されている群れ

猿が群れで生活する場合、その成育環境における生活習性から育まれる相互親近感を互いに対して抱いていると私には想像される。が、セミヨーフは書く。

○人間の社会との対比では猿の場合、基本的には個体本能である。まずは自分自身の生命を守るため

の摂食本能と防衛本能、そして種族本能である性本能と母性本能が主要な要素であつて、これを満たすために群れを維持する。

そして猿の群れでの結合体の核は母子家族、または親子家族である。

○二頭の欲求なり志向が衝突する時の調整は、強者の弱者に対する抑圧と、それに対する弱者の服従の形で行われる。人間以外の動物個体は自分ではその本能を抑制するすべし能力を持たない。より強力な動物が、自己の本能的な欲求を満たすためにより劣弱な個体を抑圧する。

同等の力関係の場合に一時的休戦がまれでなかつたであろうが、いずれにせよその下での諸本能の抑制であり、動物個体主義が支配している。

サル類にみられるハレム \parallel ボスオスとそれが支配する複数のメス、その子らによる家族の形成もそうした原理に基づいていた。

前人（猿人）の出現

今から五百〇百万年前、現存類人猿よりは一步人類に近づいた地上生活者が存在していたことが化石から明らかになった。前人（猿人）アウストラロピテクスと呼ばれた。

猛獣に対する自衛のため、石や棒が使われ始め、さらに組織的な狩猟のために以前よりも大きな結合体 \parallel 群れへの必要が生まれた。猿の段階では群れが単一の総体として振る舞うのは、外部から攻撃が加えられる瞬間のみに限られていた。そこからは一步前進であつた。

しかし、ハレム家族では大きさに限界があつた。彼ら前人は（人間でないという意味での）動物で

あつて、自己の諸本能の充足だけを志向していた。前人群の中でのつかみ合いは猿の場合よりも頻繁であつたし、さうとう大きな動物を殺しうる石や棍棒 \parallel 道具も使われた。

他の動物でもしばしば見られるメスをめぐつてのオス同士の激突は、素手の場合には普通起こらない死をもつて終わることがまれでなかつた。そのことは損傷のある頭蓋骨の化石から推測された。

群れの内部抗争の時期と、敵に対する共同防衛や集団狩猟の時期とが交代しながら続いた。内部抗争の期間が優勢になつている群れは、早晚滅亡していくほかなかつた。

動物個体主義からの脱皮に向けて

群れの中の抗争は、メスをめぐつて、ハレム(単雄)家族のボスと、ボスでないオスとの間でもに起こつた。この抗争を抑えること、すなわちハレム家族を解消した群れが集団狩猟をはじめ、無駄な精力の消耗を回避することによつて、生産活動を発展させる結合体となりえた。

性的欲望のような生物的本能を規制することをはじめ、動物個体主義の制限が結合体 \parallel 群れの全成員にとつての客観的な必要事となり、やがて彼ら集団の欲求となつていった。

狩りや道具作りなどの彼らにとつての生産活動、その経験の交換、協同行動の調整に当たつて、最初は見よう見まねで行つていたが、新しい伝達手段 \parallel 音声言語の有用性・必要性が彼らにますます明らかになつていった。これはより継続的な協同関係が生まれる条件ともなつた。

動物個体主義が引き続き個々の成員を完全に支配しているような結合体は、そこから脱することがなければ、結局衰退の道をたどつた。

前人の群れの中でも、衝突がより頻繁に起こり、苛酷な性格を強く帯びているグループでは体の大きさや体力の増加⇨大型化（パランドロプス、ギガントピテクスなど）へ向かった。強力な体力のゆえに道具を用いずとも敵から自己をよく防衛することができた。しかし、前人（猿人）のこの系列の進化は人類へ発展する道から外れやがて消えた。

ネアンデルタール人（旧人）

火を使うグループが現れる。百〜五十万年前？ シナントロプス（北京原人）、そして五十〜四万年前？ 旧人とも言われるネアンデルタール人が地球のそうとう広い地域（ユーラシア大陸のかなりの部分を含む）にわたって生存し、その化石も少なからず発見された。

その頃から、彼ら原始人類では自分たちの群れにとつて危険となるような、構成員の欲求すなわち性欲や食欲その他に対する「集団の意識」としてのコントロールが始まった。自分の個体的欲望を満足させようとする者の志向が、集団の必要や利益と対立する場合には、集団の利益のために個体的利益を自制し讓ることが要求されていく。

日常生活を律するものとして慣習が重要な位置を占め、それから逸れる行為は普通行われぬ。その中でも特に避けられる事柄も生まれる。すなわちタブー⇨その行為が常に望ましくない結果と結びついているとして忌避する習性⇨禁忌きんぎが発生する。

やがて、これは道徳、モラルの形成につながる。社会意識としての善・悪や、構成員の内面における義務・名誉・良心・良心の呵責といった感情が生まれていく。

途中省略

続きは製品版にてお読みください。

著者プロフィール

佐道 正彦 (さどう まさひこ)

1937年、大阪府堺市に生まれる。

1956年、大阪府立三国丘高校卒業。

1962年、大阪大学医学部卒業。大阪大学大学院にて母子衛生の研究をする。

1973年より、阪南中央病院にて産婦人科の診察に従事。

主な著書に『はたらく女性の妊娠と出産——社会婦人科学的にみた』（1995年、形成社）、『一市井人の戦後五十余年——私の中の社会主義』（2001年、日本図書刊行会）、『社会医学と日本の母子衛生』（2004年、医学書院）がある。

もんがいと にんげんこう

門外徒人間考 人間らしい生き方の探究

2011年 9月15日 電子版発行

著者 佐道 正彦

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Masahiko Sado 2011 Coded in Japan

ISBN978-4-286-10658-8

(紙の書籍をお求めの場合には、お近くの書店にてお尋ねいただくか、文芸社ホームページ

<http://www.bungeisha.co.jp> をご参照ください。)